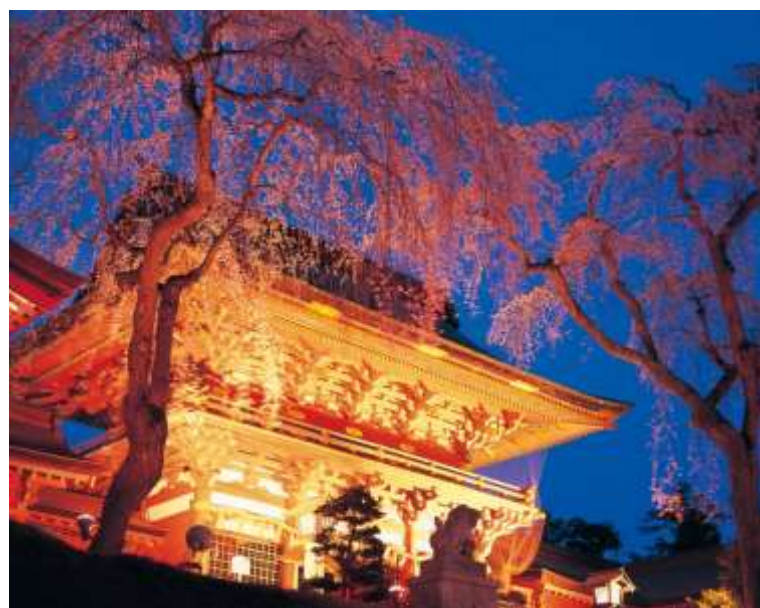


# 第65回 宮城県中学校技術・家庭科教育研究会

## 仙台地区大会



「みやぎデジタルフォトライブラリー」より

令和5年10月31日（火）

宮城県中学校教育研究会技術・家庭科部会

# 目次

|                                                                      |    |
|----------------------------------------------------------------------|----|
| 御挨拶                                                                  | 1  |
| 宮城県連合中学校教育研究会 技術・家庭科部会 会長 大泉 真澄                                      |    |
| 大会開催要項                                                               | 2  |
| 功労者紹介                                                                | 3  |
| 会場図                                                                  | 4  |
| 宮城県研究概要                                                              | 5  |
| 宮城県連合中学校教育研究会 技術・家庭科部会 研究部長 鈴木 正光                                    |    |
| 課題別分科会資料（技術）                                                         | 12 |
| 「材料と加工の技術」 発表者 登米市立中田中学校 教諭 佐藤 正太郎<br>指導助言者 宮城県総合教育センター（指導主事） 氏家 裕 様 |    |
| 課題別分科会資料（家庭）                                                         | 18 |
| 「消費生活・環境」 発表者 塩竈市立第一中学校 教諭 今野 房子<br>指導助言者 宮城県総合教育センター（指導主事） 嶺岸 さゆり 様 |    |
| 講演会資料                                                                | 24 |

# あいさつ

宮城県連合中学校教育研究会

技術・家庭科研究部会

会 長 大 泉 真 澄

今年は、7月から3カ月連続で県内の全観測所で月の平均気温の記録を更新するなど、これまでにない暑い夏でした。10月に入り、一気に季節が進み塩釜港から吹く海風に冬の到来を感じるなか、第65回宮城県中学校技術・家庭科教育研究大会仙台地区大会が、多くの御来賓の皆様の御臨席を賜り、また、県内各地より多くの会員の皆様の参加を得て、新鮮な魚介類が豊富で港町独特の食文化を持つここ塩竈市で開催できますことに心より感謝申し上げます。

本研究会では、平成29年度からの3年間は『「これからの社会を生き抜くための力」の育成を目指して』を研究主題とし、学びを深める実践的・体験的な活動を取り入れた指導法の工夫を中心に研究に取り組みました。令和2年度は新たに研究主題を設定し、研究をスタートするところでしたが、新型コロナウイルス感染症対策から研究活動が停止したものの、令和3年度から研究を再開し、『「より良い未来を創造する力」の育成』を研究主題として、研究を進めてきています。現行の学習指導要領の全面実施から3年目を迎え、これまで本県で取り組んできた「つながり」についてもう一度新たな視点で捉え直し、実践を積み重ねていくためにも今大会の研究発表の研究協議並びに筒井恭子元教科調査官の講演を通して日々の授業実践改善のヒントを探っていきたいと考えております。皆様の忌憚のない御意見、御助言等をいただきますようお願い申し上げます。

中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）』では、人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある時代の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。これらのことは、技術分野の「生活や社会における事象を、技術との関わりの視点で捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性等に着目して技術を最適化すること」といった、技術ならではの視点や思考を働かせる学習活動や家庭分野が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって自立した共に生きる生活の創造ができるような内容の学習活動を通して、実現できるものと考えます。

さて、本大会は本教科を担当する教員同士で学び合う機会となることを目的に掲げ、開催地区の負担等も考慮し、大会開催日程や内容について見直してまいりました。今後の技術・家庭科研究部会の更なる充実発展のため、今後とも皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。

結びになりますが、本大会の開催に向け、これまで温かい御指導と御助言を賜りました宮城県教育委員会をはじめ、塩竈市教育委員会、宮城県総合教育センター、そして今大会を快くお引き受けくださいました塩竈市、会場の塩竈市市民交流センターに対しまして心からお礼申し上げます。また、大会運営に当たられました仙台管内中学校教育研究会技術・家庭科部会の皆様に深く感謝申し上げます。御挨拶といたします。

# 大会開催要項

- 1 **主 催** 宮城県連合中学校教育研究会技術・家庭科研究部会
- 2 **主 管** 仙台管内中学校教育研究会技術・家庭科部会
- 3 **後 援** 宮城県教育委員会、塩竈市教育委員会
- 4 **日 時** 令和5年10月31日（火） 12:30～16:00
- 5 **会 場** 塩竈市市民交流センター遊ホール  
〒985-0052 宮城県塩竈市本町1-1 壱番館5階
- 6 **研究主題** 「よりよい未来を創造する力」の育成  
～「つながり」を生かした指導と評価の方法について～

## 7 日 程

| 12:30 | 12:50 | 13:20 | 13:25      | 14:10  | 14:20 | 15:40 | 15:45 | 16:00 |
|-------|-------|-------|------------|--------|-------|-------|-------|-------|
| 受付    | 開会行事  |       | 課題別<br>分科会 | 休<br>憩 | 講 演   |       | 閉会行事  |       |

## 8 開会行事

- 1) 開会のあいさつ 宮城県連合中学校教育研究会技術・家庭科研究会長（大会実行委員長）
- 2) 祝 辞 塩竈市教育委員会教育長 吉木 修 様
- 3) 来賓紹介
- 4) 講師紹介  
講師 宮城県総合教育センター 主幹（指導主事） 氏家 裕 様  
宮城県総合教育センター 主幹（指導主事） 嶺岸 さゆり 様
- 5) 功績者の表彰
- 6) 研究概要の説明 宮城県連合中学校教育研究会技術・家庭科研究会研究部長
- 7) 諸連絡

## 9 課題別分科会

技術分野「材料と加工の技術」発表者 登米市立中田中学校 教諭 佐藤 正太郎  
家庭分野「消費生活・環境」 発表者 塩竈市立第一中学校 教諭 今野 房子

## 10 指導助言者

技術分野 講師 宮城県総合教育センター 主幹（指導主事） 氏家 裕 様  
家庭分野 講師 宮城県総合教育センター 主幹（指導主事） 嶺岸 さゆり 様

## 11 講演 「資質・能力を育む技術・家庭科の授業づくりと評価」

講師 文部科学省初等中等教育局 教育課程課 元教科調査官 筒井 恭子 様

## 12 閉会行事

1) 閉会のあいさつ

2) 次期開催地あいさつ 次期開催地区代表（北部地区技術・家庭科研究会会長）

## 功労者紹介

東北及び宮城県中学校技術・家庭科教育のために、長い間ご尽力いただいた方々をご紹介します。今年度の表彰者は東北が1名、宮城県が1名です。これまで誠にありがとうございました。

〈東北〉 【 工藤 哲 先生 】

〈宮城県〉 【 狩野 浩二 先生】

## <MEMO>

---

---

---

---

---

---

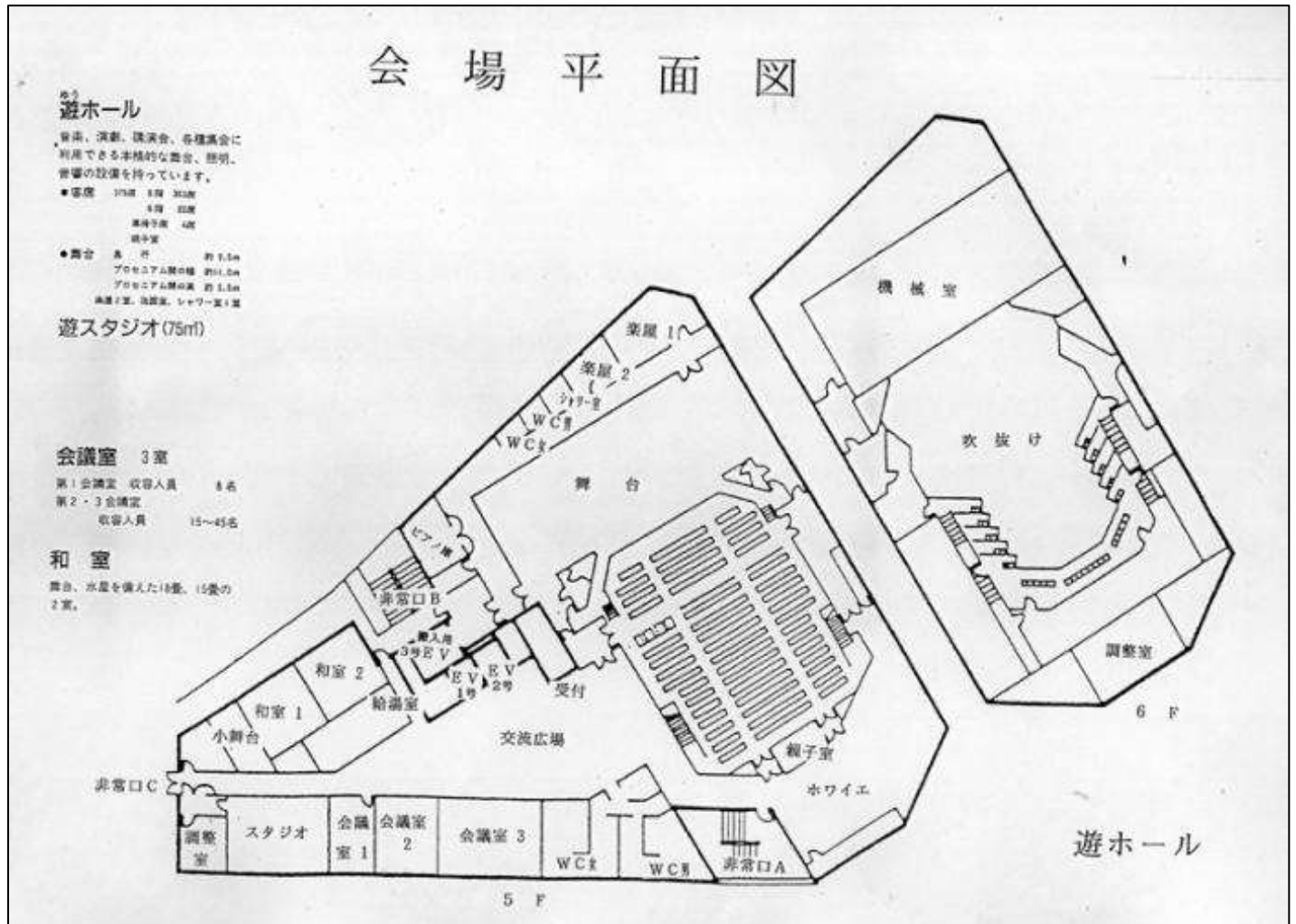
---

---

---

---

# 塩竈市市民交流センター 遊ホール 壱番館5階 会場図



# 宮城県研究概要説明

説明者

宮城県研究部長      鈴木   正光

## 「よりよい未来を創造する力」の育成

～「つながり」を生かした指導と評価の方法について～

宮城県連合中学校教育研究会技術・家庭研究部会  
富谷市立東向陽台中学校 主幹教諭 鈴木 正光

### 1 はじめに

現代社会は、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化、グローバル化や少子高齢社会の進展、AIやIoT等の技術革新等による社会的変化が人間の予測を超えて進行する状況となっている。社会構造や雇用環境も急激に変化し、数年単位でパラダイムシフトが起きるなど、今後ますます将来の予測が困難な時代になるものと考えられる。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大によりこれまでの学校生活の取組は、根本的な見直しを迫られることとなった。ICT機器の導入が進み、これらの機器を活用することを前提とした新たな学習スタイル<sup>※1</sup>が構築されるなど、私たち教職員も否応なく変化することが求められている。

本県では平成26年度からの3年間、『「生活で活用できる力」の育成を目指して』を研究主題とし、社会や地域と家庭、学校間や教科間などの「つながり」を生かした学習指導について研究に取り組んできた。

平成29年度からの3年間はこの流れを受けて、『「これからの社会を生き抜くための力」の育成を目指して』を研究主題とし、学びを深める実践的・体験的な活動を取り入れた指導法の工夫を中心に研究に取り組んできた。

コロナ禍で令和2年度は研究が停止したものの、令和3年度より研究が再開し、『「より良い未来を創造する力」の育成』を研究主題とし、これまで本県で取り組んできた「つながり」についても一度新たな視点で捉え直しながら研究に取り組むこととなった。

### 2 本県の現状について

#### (1) 全国学力・学習状況調査の結果から

本県の令和5年度全国学力・学習状況調査における学校質問紙調査結果によると、「主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導の改善」に関する質問において、「資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行う」「自分の考えを相手にしっかりと伝える」の2つの項目について全国値との乖離が大きいことが報告されている。

「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るだけでなく、技術・家庭分野ならではの学び<sup>※2</sup>に迫るためにも、より一層、授業展開の工夫を充実させるための取組が必要であると考えられる。

また、宮城県教育委員会の令和4年度の報告によれば、前年度までに、近隣等の小・中学校と、教育課程の接続や教科の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行ったと回答している割合が全国平均を下回っている。各教科における単元の系統について小中学校が互いに理解し合うことの重要性が指摘されており、本県の研究においても小中連携や中高連携に関する取組がなされているものの、課題が残る状況となっている。本年度の全国学力・学習状況調査の速報値では、ある程度の改善が見られるという報告もなされているが、今後も小・中・高との連携や異校種間交流、教科横断的な学習内容の組織的な配列（カリキュラム・マネジメント）等についても見直しを図る必要があると考えられる。

※1 スタディ・ログ：学びの記録（デジタル記録に重点を置く）

※2 例えば、どのような新しい価値を創造したり既存の価値に変革をもたらしたりすべきかといった社会からの技術に対する要求と、開発・利用時の安全性、自然環境に関する負荷、開発・利用に必要な経済的負担等の相反する要求の折り合いを付け、最適な解決策を考えること

## (2) 本県技術・家庭科の教育的な課題から

昨年度、研究推進委員会で本年度の研究の方向性について協議したところ、研究の3年目となる本年度は、「工夫」→「実践」⇒『評価』という流れがよいという意見があった。評価の観点数が4→3に変更となるなど、評価の難しさについて実感しているという意見もあったことから、本年度は評価の方法について、改めて確認をしながら研究を進めていくことがよいと考えられる。

また、技術科、家庭科ともに教員数が減少している中で、新任の先生や若手の先生にどのように指導技能を継承していくべきなのかということも話題となった。コロナ禍の影響で、「教科の研修会に初めて参加した」という先生もあり、評価の方法も含めて、先生同士で情報交換をする機会を設定することが必要であると考えられる。

## 3 主題設定の理由について

### (1) 研究主題・副題について

現代社会の特性や本県の現状、研究の成果等を踏まえ、予測が困難で急激な社会の変化に主体的に対応できる生徒を育成するため、本研究会では研究主題を『「よりよい未来を創造する力」の育成』、副題を『「つながり」を生かした指導と評価の方法について』とした。

### (2) 研究のねらい

本研究では、よりよい未来を創造しようとする力を育成するために、目指す生徒像を「変化の大きい社会や生活を生き抜くために、今まで学んだ知識や技能を生かして、実生活の中から問題を見だし、他人と協働しながら課題解決について考え、学んだ事を社会や生活に生かす生徒」とした。

具体の生徒の姿としては、①これまでの知識と社会や生活との「つながり」から問題を見いだすことができる生徒、②教師や生徒同士の「つながり」から課題解決を考えることのできる生徒、③課題解決を通して学んだことを社会や生活に「つなげ」生かそうとする生徒、の3つが考えられる。

このような生徒を育成することを目標とし、これに迫るための指導の手立てを明確にし、教育的効果を検証することを研究のねらいとしている。

初年度の研究では、3年間を見通した指導計画を作成し、日常生活との関連や地域の実態などを考慮したり、小学校での指導内容や高等学校での学習内容との関連を図るなど、「つながり」を意識した学習題材を工夫し、一定の成果が得られた。ICT機器の活用やカリキュラム・マネジメント表の作成についても大きな成果があった。

2年目の研究では、題材の工夫、問題解決的な学習の拡充、指導と評価の一体化の更なる充実に向けて地区ごとに主に実践研究に取り組んだ。理科と技術のカリキュラムを詳細に検討し、題材配列や指導内容に工夫を凝らす取組などを通して、生徒が自ら問題を見出し、技術・家庭科の「見方や考え方」を駆使して課題を設定し、その解決に向かう取組が報告されるなど、地区ごとに充実した研究が行われることとなった。

3年目となる本年度は、評価の方法についても研究を進めることとした。初年度と2年目で評価計画や3年間を見通したカリキュラム表について既に研究が行われている。指導と評価の一体化に向けて、適切な評価基準の設定や、指導と評価が一体となった可視化できる評価方法の工夫などが求められており、これらについても検討していくこととした。

### (3) 研究主題・副題のとらえについて

① 「よりよい未来を創造する力」について  
研究主題の「よりよい未来を創造する力」を次の3つの資質・能力と捉えた。

- ア) 生活と技術についての基礎的な理解とそれらに係る技能
- イ) 生活や社会の中から問題を見だして課題を設定し、課題を解決する力
- ウ) よりよい生活の実現のため、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度

② 「つながり」について

研究主題の「よりよい未来を創造する力」を育成するためには、生活や社会と既習の知識との関連を図った問題解決的な学習を効果的に取り入れ、資質・能力の三つの柱を相互に関連させることが重要である。

学習過程の一連の流れ※<sup>3</sup>において、よりよい未来を創造するため、身近なつながりから取り組ませたいと考え、以下の3つのつながりをもとに研究を進めていこうと考えた。

ア) 既習の知識と経験や、社会や家庭生活との「つながり」から問題を見いだす手立ての工夫（知識のつながり）

イ) 教師や生徒同士、また専門家や有識者との対話的な学びによる「つながり」から課題解決を図る手立ての工夫（人とのつながり）

ウ) 課題解決を通して学んだことを社会や自らの生活に「つなげ」生かそうとする手立ての工夫（生活とのつながり）

## 4 研究の内容について

### (1) 3年間を見通した指導計画の作成

学習指導要領の改訂による題材の配列や評価計画を検討し、3年間の指導計画（カリキュラムモデル）を作成する。

### (2) 「つながり」を生かした題材の工夫

生徒が生活する地域に即した教材や経験を実生活と結び付けながら知識・技能を身に付けることができる題材を選定する。

ア) 生徒の生活体験や既習事項を踏まえた問題を見出し課題を解決する学習題材の工夫

イ) ICT 機器を活用した対話的な学びの拡充

ウ) カリキュラム・マネジメントの推進

エ) 小学校・中学校・高等学校の指導内容における連携の強化

### (3) 授業実践と分析

研究の視点に沿った研究授業を実施するとともに、その分析を行い、手立ての有効性について検討する。特に「つながり」を生かした授業の実践を行い、題材や手立ての有効性について検証する。

### (4) 評価計画の作成（令和4年度より）

学習指導要領に対応した評価計画の作成を行う。より適切な評価計画を作成するため、Google Classroom などを活用し、題材や指導法、評価につい

て県内で実践結果を共有する。

## 5 研究の視点

### (1) 見方・考え方を生かした学習過程の工夫

① 既習の知識と社会や生活との「つながり」から問題を見いだす手立ての工夫（知識のつながり）

② 教師や生徒同士での対話的な学びによる「つながり」から課題解決を図る手立ての工夫（人とのつながり）

③ 解決結果を社会や生活との「つながり」から生かそうとする手立ての工夫（生活とのつながり）

### (2) 資質・能力の向上を見取る評価方法の工夫

① 資質・能力を見取る評価規準の設定の工夫

② 評価規準を見取るワークシートなどの評価方法の工夫

## 6 本年度の具体の研究の手立て

### (1) 本年度の研究の課題

#### 課題1 「教科間のつながり」を明確にする。

→ 指導時数が少ないことをカバーするため、他教科の学習内容と関連させた「カリキュラム・マネジメント表」を作成し指導に生かす。

→ 小・中・高の系統的な「つながり」の実現を目指し、生徒のレディネス差の把握や小学校の既習内容、高等学校の学習内容の理解につなげる。

#### 課題2 「指導と評価の一体化」の充実を図る。

→ 適切な評価規準の設定や指導と評価が一体となった「授業者も学習者も判断しやすい」評価方法の工夫について検討する。

→ 教育課程の編成・実施⇒学習評価⇒教育課程の改善・充実（PDCA）につなげる。

### (2) 基本方針

① 研究の視点を明確にし、視点に沿った授業を実施するとともに、その検証を行い、手立ての有効性について検討する。

※3 課題の設定（発見）→ 課題の解決に向けた観察や実験、調査、実習等（実践活動）→ 問題解決の視点（家庭・地域での実践）

- ② 研究計画を明確にし、周知するとともに授業実践については結果を蓄積していく。これにより生徒の変容を明確にする。
- ③ 新型コロナウイルスや働き方改革などの影響であいまいとなった研究組織を明確にし、今後の研究体制の安定を図る。
- ④ 世代交代が進行する中で、若手と中堅の情報交換の場所や機会を提供し、若手への指導技能の継承を推進するよう努める。

### (3) 研究構想図 別紙参照

### (4) 研究組織

研究部長は県大会主管地区の研究部長が担当し、副部長は他の6地区の研究部長が担当している。研究の継続性の観点から、前年度と当年度、翌年度の県大会主管地区の研究部長3名が特に緊密に連携を取りながら研究を進めている。

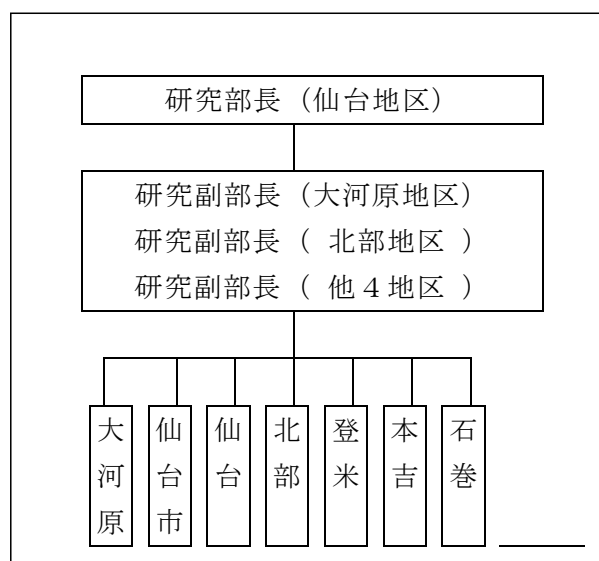


表1 令和5年度の研究組織

### (5) 研究計画

本研究は、令和3年度から5年度まで3年間の継続研究となっている。令和6年度は新たな研究主題を設定し、研究を進めていくこととしている。

表2 研究計画

| 年         | 研究の主な内容及び計画                                                                                                                                                                                                              |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 令和3年度     | ★研究組織の編成<br>★研究主題、副題の決定<br>★具体の研究方法の検討<br>・カリキュラムモデルの作成<br>・「つながり」の題材の整備<br>★授業実践<br>★公開研究会による研究の検証<br>★各地区の取組の情報共有<br>★研究の成果と課題のまとめ<br>★次年度の課題の検討                                                                       |
| 令和4年度     | ★研究組織の編成<br>★研究副題の提案<br>★研究方法、研究計画の修正<br>★各地区の取組の情報共有<br>★授業実践<br>★公開研究会による研究の検証<br>（公開研究会の在り方について）<br>★中間報告<br>★各地区の取組の情報共有<br>★研究の成果と課題のまとめ<br>★次年度の課題の検討<br>☆次年度の研究主題の情報交換                                            |
| 令和5年度（予定） | ★研究組織の編成<br>★研究副題の提案<br>★本県の令和5年度全国学力・学習状況調査の分析と対応<br>★研究方法、研究計画の修正<br>★授業実践<br>★公開研究会による研究の検証<br>★研究の成果と課題のまとめ<br>★最終報告<br>↓<br>☆新たな研究主題と副題の仮決定<br>・研究のまとめによる課題から<br>・各地区の研究部長の意見から<br>・本県や各県の具体の取組から<br>・調査分析官の講話や意見から |

## 7 参考文献

- 宮城県検証改善委員会報告書(2022)「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて！」、宮城県検証改善委員会、  
<https://www.pref.miyagi.jp/documents/6871/r4kensyousekaizeninnkaihoukokusyo.pdf>
- 宮城県の調査(2023)「令和5年度全国学力・学習状況調査結果について（速報）」、宮城県教育委員会、  
[https://www.pref.miyagi.jp/documents/47625/r5\\_zenkoku\\_gakuryoku\\_miyagi.pdf](https://www.pref.miyagi.jp/documents/47625/r5_zenkoku_gakuryoku_miyagi.pdf)

## 《技術・家庭科の目標》

生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を育成する。

### 研究主題

## 「よりよい未来を創造する力」の育成 ～「つながり」を生かした指導と評価の方法について～

### 研究目標

下記の目指す生徒像に迫るための指導の手立てを明確にし、教育的効果を検証する。

### 研究の視点

視点1

見方・考え方を生かした学習過程の工夫

視点2

資質・能力の向上を見取る評価方法の工夫

### 令和5年度の研究の課題

「教科間のつながり」を明確にする

「指導と評価の一体化」の充実を図る

### 【研究の基本方針】

- ① 研究の視点を明確にし、視点に沿った授業を実施するとともに、その検証を行い、手立ての有効性について検討する。
- ② 研究計画を明確にし、周知するとともに授業実践については結果を蓄積していく。これにより生徒の変容を明確にする。
- ③ 新型コロナウイルスや働き方改革などの影響であいまいとなった研究組織を明確にし、今後の研究体制の安定を図る。
- ④ 世代交代が進行する中で、若手と中堅の情報交換の場所や機会を提供し、若手への指導技能の継承を推進するよう努める。

【教育の今日的課題】  
・家族・家庭生活の多様化  
・グローバル化や少子高齢社会  
・ICT機器の導入

【宮城県の課題】  
・主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導の改善（工夫して、発言や発表を行う）（考えをしっかりと伝える）  
・小中連携など異校種間交流

【先生方の現状】  
・評価の方法の難しさを実感  
・先生同士の情報交換の場が少ない（評価も含めて）

【研究の経緯から】  
・3年間を見通した指導計画  
・「つながり」の題材の工夫（異校種間連携でのつながり）（他教科との題材のつながり）

### 目指す生徒像

「変化の大きい社会や生活を生き抜くために、今まで学んだ知識や技能を生かして、実生活の中から問題を見だし、他人と協働しながら課題解決について考え、学んだ事を社会や生活に生かす生徒」

## 《役員会》《研究推進委員会》《研究全体会》

- ・研究組織の編成 ・研究主題の決定 ・研究方法の検討 ・全国学調の分析 ・文献研究 ・資料の累積
- ・模擬授業 ・公開研究 ・授業の検証 ・次年度の課題の検討 ・中間／最終報告

[illegible]

# 課題別分科会（技術）

## 「材料と加工の技術」

発表者

佐藤 正太郎 登米市立中田中学校 教諭

指導助言者

氏家 裕 総合教育センター 主幹(指導主事)

# 「よりよい未来を創造する力」の育成

## ～「つながり」を生かした指導と評価の方法について～

宮城県 技術・家庭科研究会  
登米市立中田中学校 教諭 佐藤 正太郎

### 1 はじめに

本研究会では、今年度「よりよい未来を創造する力の育成」を研究主題とした。ここ数年だけでも社会情勢がめまぐるしく変化し、それに応じて人々の生活環境も常に変化している。それらに主体的に対応し、自立した学習者として問題を見いだして課題を設定し、解決していく力を育成することが、技術・家庭科の学習で求められている。そこで、本研究会では、今年度「よりよい未来を創造する力の育成」を研究主題とした。

また、ものづくりの活動を行う際に、問題を発見して課題を設定し、解決のための設計を行い、具体化するという流れで行うという技術分野の学習過程を充実させることで、生徒が主体的に取り組み、達成感を味わうことができると考えられる。そこで本研究では、指導と評価の工夫として、生徒一人一人がタブレットを使い、問題発見や設計、製作の場面での活用を図る。イメージを可視化でき、自分の個性を生かした創意工夫を表現しやすくなり、適切な評価につながるのではないかと考え、本副主題を設定した。

### 2 研究のねらい

#### (1) 生徒の実態から

Googleフォームを活用し、市内3校の中学1年生266人にアンケートを実施した(令和5年7月)。「何かものを作ることは好きですか?」という質問に対して91%の生徒が「とても好き」「わりと好き」と回答し、「これまでに、木材などの材料を使って自分で製作をしたことがありますか。」という質問に対して67%の生徒が「ある」と回答した。ものづくりに対する興味や関心が高く、半数以上の生徒が小学校までに製作の経験があることが分かった。しかし、「これまでに、自分で設計して製作をしたことがありますか。」という質問に対して

は73%の生徒が「ない」と答え(図1)、「等角図など図をかいて設計をしたことはありますか。」という質問に対しては86%の生徒が「ない」と答えた。(図2)

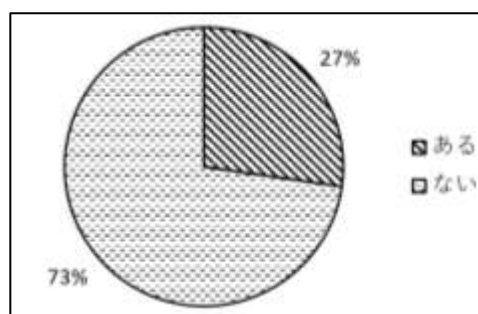


図1 これまでに、自分で設計して製作をしたことがありますか。

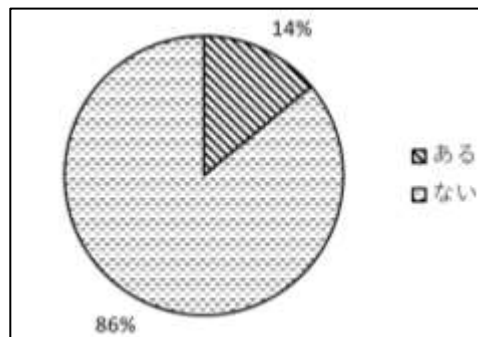


図2 等角図など図をかいて設計をしたことはありますか。

このことから、これまでものづくりはしてきたが、計画的に製作した経験はなく、偶発的なものづくりの経験しかないということが分かった。そこで製作図などをかいて計画的に製作をすることで、よりよい完成品や完成した後の修正や改善などにつながることを身に付けさせたいと考えた。

また、製作図には等角図を用いるが、「頭の中のイメージを図に表すことは得意ですか。」という質問に対して、41%の生徒が「あまり得意ではない」「苦手」と回答しており、頭の中でイメージした製作物を図に表すことを得意としていない生徒が多いことが分かった。(図3)

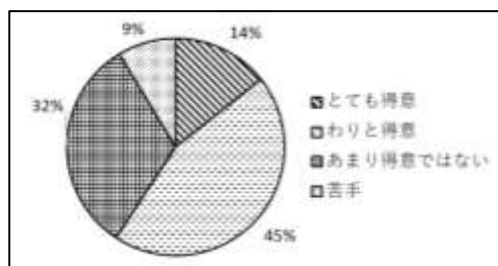


図3 頭の中のイメージを、図に表すことは得意ですか。

そこで、内容A「材料と加工の技術」の製図や設計の学習場面で、一人一台のタブレット端末を用いて、webサイト「Tinkercad」を活用して等角図をかく練習を行い、頭の中で構想する力や、等角図のかき方を身に付けさせ、材料と加工の技術に関わる資質・能力を育みたいと考えた。

## (2) 登米市内の技術科教員のつながり

登米市の人口は約7万7千人であり、10校の中学校がある。その10校の技術科の授業を、技術科の免許を持っている教員3名、免許外の教員1名、非常勤講師2名の計6名で担当している。2～3校を兼務して技術科指導を行っている教員もいる状態である。

技術・家庭科の指導計画は、本来3年間を見通して計画的に設定するなど各学校において適切に定めることになっている。しかし、家庭科においても同様に、兼務をしている教員が複数いるため、登米市の技術・家庭科の年間指導計画や学習教材の統一を検討している段階である。共通の年間指導計画や学習教材を使用し、共同で教材研究することで、授業の質が上がり、資質能力の向上が期待できる。また、免許外の教員が担当の学校でも、市内の免許を持っている教員がサポートできる。今年度研究を進めるにあたり、統一した教材として、3Dモデルを開発することにした。

## (3) 研究目標

本研究では、生徒の実態を踏まえ以下のような生徒の育成を目指した。

- ・自ら生活の中や身の回りの問題を発見し、課題を設定して解決するための力を身に付けている生徒。
- ・課題解決をするうえで計画したものを実施し、評価・改善をしてまた新たな課題へ生かすことができる生徒。

## (4) 研究仮説

一人一台端末を使い、3Dモデルを見ながら等角図をかく練習や問題解決のための設計を行うことで、設計後の工夫や評価がしやすくなり、問題を解決する力や創造しようとする態度の育成につながるであろう。

## 3 研究内容

### (1) 内容Aの指導計画(一部抜粋)(第1学年)

| 内容(★:3Dモデルの活用場面) | 時数  |
|------------------|-----|
| さまざまな材料と加工の技術    | 1   |
| 木材の材料と加工の技術      | 1   |
| 金属の材料と加工の技術      | 0.5 |
| プラスチックの材料と加工の技術  | 0.5 |
| 構造をじょうぶにする技術     | 1   |
| 製図★              | 2   |
| 問題解決の流れ          | 0.5 |
| 問題の発見と課題の設定      | 0.5 |
| 設計★              | 3   |

### (2) 3Dモデルの作成

2つの図法(等角図、第三角法による正投影図)のかき方の習得において、図をかくことを苦手としている生徒が多いという実態から、練習の機会を多く設ける必要があると感じた。また、頭の中で立体をイメージし、それを回転させて多面的に捉えることが難しい生徒もいることが分かった。これらの課題を解決するためには、生徒一人一人の実態に合わせ、複数の立体模型を準備し、練習に多く取り組ませる必要があるが、練習のための時間や、生徒数に合わせた立体模型を確保することが難しい現状があった。そこで、webサイト「Tinkercad」の3DCAD機能を用いて、生徒がかく立体の3Dモデルを作成することにした。

教科書に記載されているL字型ブロックや、習得を図るための課題として8種類の立体を作成し、難易度別(レベル1～3)に提示した。作成にあたっては、一つのモデルあたり約10分程度で完成させることができ、形の変更も容易にできるため、様々なバリエーションのモデルを準備することができた。(図4)

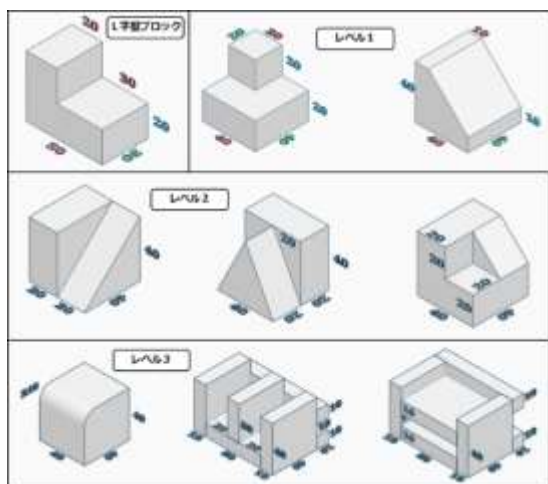


図4 Tinkercadで作成した難易度別 3D モデル

その際、寸法を3Dモデルの側に表示させることで、生徒がかきやすくなるようにした。加えて、L字型ブロックとレベル1のモデルについては、寸法の文字色を、幅は赤、奥行きは緑、高さは青にして生徒に提示することで、生徒がどの方向の寸法なのかを意識しやすいようにした。難易度の設定としては、最初は比較的単純な図形から始め、面の数を徐々に増やしたり、棚や本立てに近い形の立体にしたりなど、生徒がかき方をスモールステップで習得できるようにした。

さらに、生徒が実際に製作する作品の、ベースとなる3Dモデル(以下、ベースモデル)を3種類作成し、それを基にして生徒が工夫点を考えたり、あるいはそのまま製作図としてかいたりする補助教材として使用できるようにした。(図5)

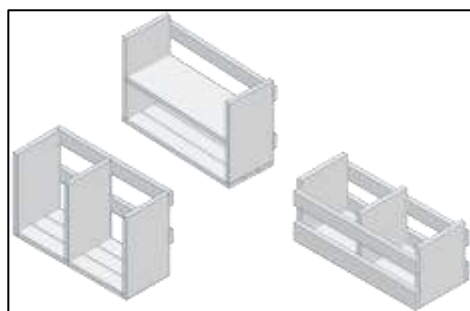


図5 ベースモデル (3種類)

### (3) 教材を用いた指導の実際

生徒が「Tinkercad」を利用する際は、予め教員が生徒用のゲストアカウントを準備し、それを用いてアクセスさせることで、ユーザー登録に掛かる時間を短縮した。生徒は、指定された手順でアクセスすることで3Dモデルを表示させることができ、回転や拡大・縮小等の操作を直感的に行うことができる。

L字型ブロックでかき方の練習をする場面では、生徒が手元のタブレットで3Dモデルを回転させ、等角図の完成イメージや、第三角法による正投影図の正面図・平面図・側面図の見え方を確認しながらワークシートにかく姿が見られた。ほとんどの生徒が、教員の支援がなくても2つの図法でかくことができていた。授業後には、「いろんな方向から見る事ができて、分かりやすかった。」や「かき方をしっかり覚えることができた。」と振り返る生徒がいた。

難易度別の課題に取り組む場面では、レベル1は2つ、レベル2と3は3つずつ、合計8つの立体に対して2つの図法でワークシートにかく課題に取り組ませた。図をかくことを得意としている生徒は、次々と課題をクリアし、その中で正しいかき方を身に付けていく様子が見られた。途中で3～4人のグループになり、課題を早く終えた生徒がまだ終わっていない生徒に教える場面を設けることで、苦手な生徒もかき方を教わって理解し、図をかくことができていた。(図6)



図6 生徒の活動の様子

生徒の中には、「立体がたくさんあって、やりごたえがあった。」や「最初は難しく感じたけど、手元で確認しながらできたので、なんとかかけた。」と振り返る生徒がいた。

実際の製作品を設計する場面では、3種類のベースモデルを基に、生徒自身が課題を考え、工夫を加えて設計の見直しを行った。また、ベースモデルで材料の配置を確認しつつ、自身の考えた工夫を加え、等角図で製作図をワークシートにかく姿が多く見られた。

また、教材の共有という点では、他校の教員にも「Tinkercad」のアカウントを作成してもらい、作成した3Dモデルを共有することで、市内2校で

同様の指導を行うことができた。ワークシートの作成や評価の仕方もGoogleClassroomを活用して互いに検討しながら進めることで、市内での学習教材の統一についても前進することができた。

#### (4) 評価の工夫

評価をするにあたり、それぞれの学習活動では以下の評価基準を設けた。

##### ①製図 2／2時間目(知識・技能)

|            |                                                                                                           |
|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| A          | 全ての3Dモデルを、等角図と第三角法による正投影図で正しくかくことができる。                                                                    |
| B          | レベル2の3Dモデルを、等角図と第三角法による正投影図でかくことができる。                                                                     |
| Cの生徒に対する支援 | 「どの方向の、何mmの線なのか。」を確認しながらかくよう言葉掛けをする。<br>寸法に合わせて製図用紙に点を打ち、おおよその外形線を捉えられるようにする。<br>グループ活動の中で、他の生徒に質問するよう促す。 |

##### ②設計 3／3時間目(思考力・判断力・表現力)

|            |                                                                 |
|------------|-----------------------------------------------------------------|
| A          | 2つ以上の側面から根拠を記載し、工夫点を加えた製作図をかくことができる。                            |
| B          | 1つの側面から根拠を記載し、工夫点を加えた製作図をかくことができる。                              |
| Cの生徒に対する支援 | 教科書を参考にさせ、取り入れたい工夫点を考えさせる。<br>3Dモデルと、過去に練習した等角図を参考にさせ、製作図をかかせる。 |

授業の際は、上記の基準を生徒に提示した。また、「なぜその工夫をしたのか。」という根拠を、製作図に併せて記載させることで、自身が考えた課題を元にした工夫を見とれるようにした(例:置く場所のスペースを考慮して、幅を35cmにする。)。それにより、個人ごとに目標を設定したり、意欲をもって取り組んだりする生徒が多く見られた。難易度のレベルや工夫点の数など、数値を示した

ことにより、生徒が自身の目標を設定しやすくなった。

## 4 研究のまとめと今後の課題

### (1) 成果

「Tinkercad」で作成した3Dモデルを用いた結果、モデルを見て自由に動かし観察することで、立体のイメージを可視化させることができた。それにより、「等角図」「第三角法による正投影図」の見方やかき方の理解度が格段に上がり、かき方の習得における時間の短縮につながった。また、評価の工夫として、生徒に評価基準を示しつつ、3Dモデルを基に課題を考えさせたことで、自分自身で授業での目標を設定し、課題解決のために積極的に取り組む生徒が多く見られた。

製図の練習課題について、今までは木材や厚紙で模型を作り提示していたが、個数を揃えるのに手間がかかったり、何度も使用することで壊れてしまったりという課題があった。3Dモデルを用いることで、最初の準備に多少時間は掛かるものの、生徒一人一人が手元で見ることができ、さらに繰り返し使える教材として提示することができた。また、データの共有がしやすいため、複数の学校や教員で使うことができ、共通の学習教材を用いるという課題に対してもメリットがあった。

### (2) 今後の課題

今後は、今回の課題解決の実践を振り返り、新たな課題へ生かそうとする態度の評価について、さらに研究を進める必要がある。

登米市のほとんどの学校で技術科教員が兼務している中で、各自が異動や引継ぎを考慮しながら教材の研究を進めていくことは困難な状況にある。今後は、教材の選定や共有、評価方法の工夫など、教員も協働で教材研究を進めていく必要がある。

生徒によりよい未来を創造する力を育成させるために、計画的・系統的に生徒の資質・能力を育むことができるよう、指導と評価の一体化にさらに努めていきたい。

## 5 参考文献・参考URL

- ・文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説技術・家庭編」
- ・「Tinkercad」 <https://tinkercad.com>

[illegible]

# 課題別分科会（家庭）

## 「消費生活・環境」

発表者

今野 房子

塩竈市立第一中学校 教諭

指導助言者

嶺岸 さゆり

総合教育センター 主幹（指導主事）

# 持続可能な社会の構築に向けて消費行動を

## 工夫し創造しようとする実践的な態度の育成

～消費者としての視点を組み込んだ指導過程の工夫と

協働的な学びを通して～

宮城県技術・家庭科研究会

塩竈市立第一中学校 今野 房子

### 1 はじめに

現行の学習指導要領では、小・中・高等学校の内容の系統性が明確になり、各内容の接続が見えるように整理された。また家庭分野の目標を実現するために、「A家族・家庭生活」、「B衣食住の生活」、「C消費生活・環境」の3つの内容について、理論のみの学習に留めず、実践的・体験的な活動を展開し、よりよい生活の実現に向けて、3つの資質・能力を養うことが示された。これを受けて宮城県中学校技術・家庭科研究会では「よりよい未来を創造する力」の育成という研究主題のもと研究を進めてきた。

本研究においては、持続可能な社会の構築に向けて消費行動を工夫し創造しようとする実践的な態度を育むことを目的とする。A、B内容において、消費者の視点を組み込んだ指導過程の工夫と協働的な学びを通して生活を総合的に学び、「よりよい未来を創造する力」を育成することを目指す。

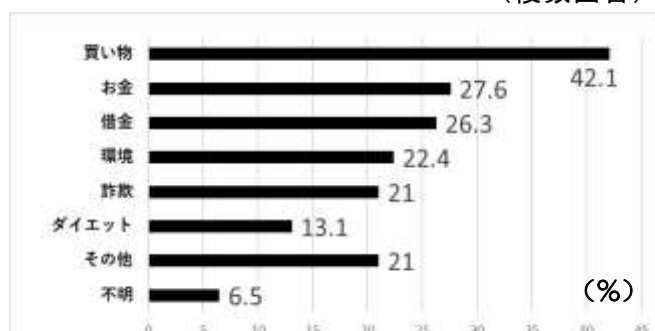
### 2 研究のねらい

#### (1) 生徒の実態

以下3つのアンケートから生徒の実態を探る。

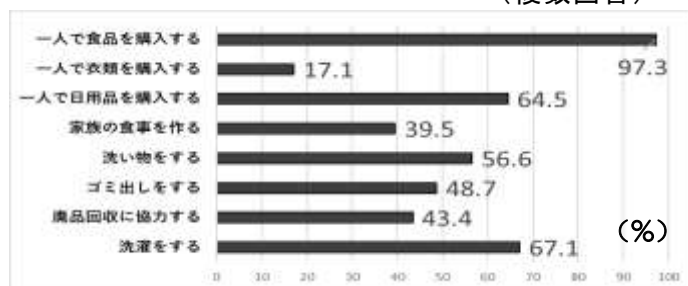
[アンケート対象：令和4年度第1学年 83名]

[図1]「消費者」という言葉から連想されるもの  
(複数回答)

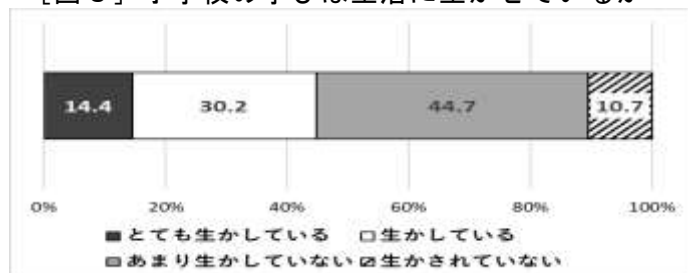


[図2] どのような消費行動を経験したか

(複数回答)



[図3] 小学校の学びは生活に生かしているか



[図1]「消費者」という言葉から連想されるものは何ですか」の問いに、買い物(42.1%)、お金(27.6%)、環境(22.4%)を選択した生徒の割合の合計が92.1%となった。小学校家庭科では、「物や金銭の使い方と買い物について」及び「環境に配慮した生活について」について学習している。それを踏まえると、小学校の既習事項が9割以上の生徒が身に付いているということになる。

しかしながら、項目を1つ1つ見るとその割合は4～2割程度となっており、既習事項は確実に身に付いているとは言えないことが分かった。

[図2]「どのような消費行動を経験したことがありますか」という問いからは、購入については食品が多く、次いで文房具等の日用品であり、生徒が手軽に買えるものが多いことが分かった。衣類については今後、成長とともに増加

することが予想される。

また環境に関わることについては、6～4割程度である。洗濯や洗い物などは、家庭でも実践しているためと思われる。

〔図3〕の「小学校の学びは生活に生かされているか」という問いに関しては、「とても生かされている」、「生かされている」と答えた生徒が44.6%と少なく、既習事項を生活の中で生かしていないと感じている生徒が多くいることが分かった。

## (2) 研究目標

消費者としての視点を組み込んだ指導過程を工夫し、協働的な学びを通して持続可能な社会の構築に向けて消費行動を工夫し、創造しようとする実践的な態度を育むことを目標とする。

## (3) めざす生徒像

生徒の実態を踏まえ、本研究では以下3点をめざす生徒像として挙げることにした。

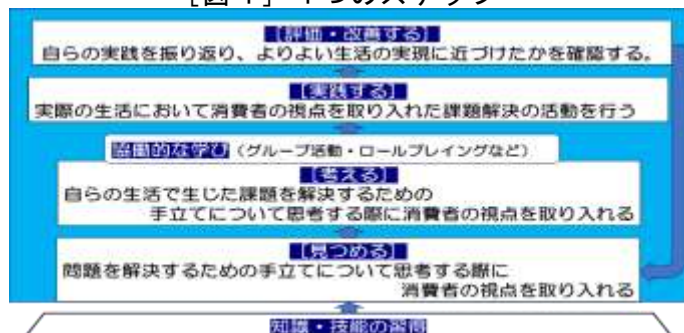
- 持続可能な社会の構築に向けて消費行動を工夫できる生徒
- 生活を総合的に学び、よりよい未来を創造できる生徒
- 生活を総合的に学び、つながりや必要性を実感し、主体的、協働的に学習に取り組む生徒

## 3 研究主題に沿っての具体的な手立て

### (1) 消費者としての視点を組み込んだ指導計画の作成

#### ① 知識・技能の習得→見つめる→考える→実践する→評価・改善

〔図4〕 4つのステップ



「C消費生活・環境」は、A、Bの内容の学習との関連を図ることが有効であることを踏まえ、各内容の学習課題に取り組む際に「消費者としての視点」を加えて思考する場面を設けた。知識・技能の習得をねらいとした学習を終えた

後に「金銭管理の必要性」や「消費者の権利と責任」、「環境への配慮」等、消費生活・環境に関連する視点を加えた指導過程を工夫することは、生徒たちが自然と消費者としての立場で家庭生活を見つめる契機になると考えた。

## ② 協働的な学びの場の設定

＜取り入れた協働的な学び＞

- 3～4人で構成するグループ活動
- ペア学習

↓  
意見交換、ロールプレイング、相互評価などを実施

小題材ごとに基礎的・基本的な知識や技能を習得した後に設定した課題解決の場面では、ロールプレイングや自分の考えを伝え合う協働的な学びを意図的に取り入れるように計画した。これは自分が学習活動で得た知識や技能がどの程度活用できていたかを生徒たち自身に気付かせることや家庭生活のどのような場面で、学んだ知識や技術を活用できるかをイメージしやすくすることが最大のねらいである。しかし、消費者としての視点を加えて思考する活動は、消費経験が未熟で消費者としての自覚が乏しい生徒たちにとって深まりや広がりが見られないため、ロールプレイングなどの活動後にアドバイスや気づきを共有する場面を設け、生徒の思考を広げ、深めることができるようにした。

他者との学び合いは自らの考えを深めたり、視野を広げたりする契機となることに気付かせ、より主体的に学習に取り組める姿勢を育み、持続可能な社会の構築に向けて消費行動を工夫できる生徒になることを目指したい。

## (2) 授業実践

### ① A家庭・家庭生活と関連付けた授業

学習指導要領「A家族・家庭生活の(1)自分の成長と家族・家庭生活」の授業に「C消費生活・環境(1)金銭の管理と購入」を関連付けた授業実践

〔指導過程(4時間)〕

|                                                 |       |
|-------------------------------------------------|-------|
| 1. 自分の成長を支えてくれた人たち                              | 知識・技能 |
| 2. 自立した人になるために                                  | 見つめる  |
| 3. 自立計画書を作成しよう<br>協働的な学び…グループ内で意見の交換と相互評価→修正・加筆 | 考える   |
| ※家庭内での実践はGW期間中に実施                               | 実践    |
| 4. 実践の報告                                        | 評価・改善 |

生徒に消費者の自覚を高めること、金銭管理の必要性に気付くことを目的とした授業を行った。家庭分野のガイダンス後に一人暮らしのシミュレーションとして、高卒就職者の給料を提示し、その使い方について考えさせた。便利で快適な生活を送るためには様々な物資やサービスを利用することになるが、無計画に金銭を使用してしまうと生活を営むことが難しくなってしまうため、自立した生活を送るためには金銭の管理が重要であることに気づくことができるよう授業を構成した。

ゴールデンウィーク中に家族のために自分ができる「手伝い」について考え、その計画を具体的に立てることを目的にした「自立計画書」の作成では、金銭の管理について考えさせるだけでなく小学校で学習した「適切な物の購入」など既習事項も取り入れていくよう助言し、学びのつながりを実感できるようにした。計画書作成後は3～4人のグループで協働的な学びの場を設定し、意見交換や相互評価を行った。自分では気付くことのできなかった新たな考えに触れることができた生徒たちは、消費者としての視野を広げることができたと感じている。

#### 生徒の感想①（一部抜粋）

- いつも通りお風呂洗いをするだけでなく、洗面所の掃除もすることにしました。
- 一番工夫したのは、掃除をするときに水を節約することを、気をつけたり洗剤や雑巾をあまり使わないで済むようにしたり、いらなくなった服などを使おうと決めたことです。
- 水の節約は今回だけでなく、これからの掃除でも気をつけたいと思いました。

### ② B衣食住の生活と関連付けた授業1

学習指導要領「B衣食住の生活（4）衣服の選択と手入れ、イ日常着の選択や手入れの工夫」の授業に「C消費生活・環境（2）消費者の権利と責任、ア消費者の基本的な権利と責任、消費生活が環境や社会に及ぼす影響」を関連付けた授業実践。

[指導過程（4時間）]

|                                     |             |
|-------------------------------------|-------------|
| 1. 衣服の手入れはなぜ必要？                     | 知識・技能       |
| 2. 制服を点検しよう                         | 見つめる        |
| 3. 制服手入れの説明書を作ろう<br>協働的な学び…グループ活動   | 考える         |
| 4. 制服手入れに挑戦しよう<br>～しみ抜き、アイロン、ブラシかけ～ | 実践<br>評価・改善 |

衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れの必要性について確認する授業を行った後、既製服に付いている表示の読み取りや繊維の種類を見分け、手入れをする方法について学習する授業を行った。自分が普段着用している制服の手入れのために必要な情報を表示から読み取る技術は、衣類を長持ちさせるために必要不可欠であることに気付くことができるよう指導過程を工夫した。しみ抜きやアイロンがけを経験したことがなかった生徒から「こんなに大変なら、クリーニングを利用すればいい。」という発言が出た。それに対して周囲から「クリーニングはお金がかかる、コスパが悪い。」と消費者の視点で発言を切り返す生徒が数名いたことから、生徒たちに消費者として生活を営むイメージが育ってきていることが感じられた。

#### 生徒の感想②（一部抜粋）

きれいな服を着ることは、健康に生活するためや周りの人を嫌な気持ちにさせないためだと思っていた。でも、服を長持ちさせるためにも大切なことなのかも知れないと思った。

### ③ B衣食住の生活と関連付けた授業2

学習指導要領「B衣食住の生活（3）日常食の調理と地域の食文化、ア（イ）食品や調理器具等の安全と衛生に留意した管理」の授業に「C消費生活・環境（2）消費者の権利と責任、イ消費者の基本的な権利と責任、消費生活が環境や社会に及ぼす影響」を関連付けた授業実践。

[指導過程（4時間）]

|                                                       |             |
|-------------------------------------------------------|-------------|
| 1. 環境にやさしい調理をしよう 1<br>消費行動と環境のつながり                    | 知識・技能       |
| 2. 環境にやさしい調理をしよう 2<br>私たちの調理は大丈夫？<br>協働的な学び…ペア活動      | 見つめる        |
| 3. エコクッキング挑戦しよう 1<br>エコクッキングの計画を立てよう<br>協働的な学び…グループ活動 | 考える         |
| 4. エコクッキングに挑戦しよう 2<br>きゅうりサラダを作ろう                     | 実践<br>評価・改善 |

#### <生徒たちの意見>

- ・水を流したまま洗い物をしている。
- ・ごみの分別が不十分である。
- ・ペットボトルをつぶしていない。
- ・材料をこぼしている。
- ・ジュースを残している。

事前に食品添加物の実験をした際の活動の様子を動画に撮影しておき、自分たちの行動が環境にどのような影響を与えるのか考える授業を行った。見直したい行動については、次の実習（包丁実技試験）で具体的に改善していくことができるよう、「どの場面で」「どのようにして」配慮していくのかなどワークシートに書きこませ、グループごと共有した。

生徒たちは、自分の行動が環境に悪影響を及ぼす原因になっていることには気付いたが、環境に配慮する手立てについては具体的にどれが最適解なのか導き出すことが難しいようであった。そのため週末の課題に「環境に配慮した生活」についての調べ学習を設定した。その後調べてきた環境保全につながる手立てをグループ内で共有し、調理実習に向けての計画と準備を行った。どの手立てが有効かについては、具体的な数値を根拠として挙げるだけでなく、YouTubeなどの動画の参照、家族へのインタビューなど様々であったため熱心なディベートが行われ、生徒たちが主体的に課題に取り組んでいることが分かった。また、実技試験に向けて家庭で練習をする際に、節水やごみの減量など環境面に配慮した行動を取り入れた、と報告する生徒も見られた。

実習当日は、たくさんの環境保護の活動を書き込んだワークシートを確認しながら作業に取り組む生徒たちの姿が見られた。また、作業を進めながら「ここも工夫できるね」と新たな視点で自らの行動を見直し、改める生徒も見られ、実践することの大切さを改めて感じる事ができた。

## 4 研究のまとめと今後の課題

### (1) 成果

#### 実践授業① 生徒の感想

今までは「便利が一番」と思っていたけれど、将来一人暮らしをしたときに生活できなくなるかも知れないと気づくことができた。家庭科の授業を頑張って自分でできることを増やして、少しでも生活に余裕ある大人になりたいと思った。

#### 実践授業② 生徒の感想

お年玉で服を買ったら、サイズが小さすぎてすぐに着られなくなってしまった。ちゃんと試着をしたり、表示を見ればよかったな、と反省しています。こういう服が返品できないこともショックです。これが「消費者の責任」なのか、と思った。

[学習後アンケートから]

「消費者という言葉から連想されるもの」

<生徒たちの回答>

- 自給自足と逆で、生活に必要なもの（食べ物や服）を買って使っている人たちのこと。
- 地球に住んでいる大体の人たちのこと。
- お金や物を使って生活している人たち。

|                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 授業で学習したことを生活に生かしている | 53.7%<br>(+9.1%) |
|---------------------|------------------|

授業の感想から、消費者としての視点を組み込んだ指導を進めていくことで消費者の視点を加えて生活を見つめ、消費行動を工夫する生徒が増えていると感じることができた。また再度行ったアンケートの中の「消費者という言葉から連想するものは何か」という問いに対しては、「SDGs」や「エシカル消費」などの単語の種類が増えただけでなく、文章で説明できる生徒が増加した。このことから消費者という存在が生徒たちの生活において身近なものに変化してきたと思われる。

また「授業で学習したことを生活に生かしている」と感じている生徒も9.1%増加したことから、生徒たちは学習したことを踏まえながら消費行動を行うようになってきていると考えられる

### (2) 今後の課題

他者の意見を取り入れることの有効性について実感できた生徒とできなかった生徒に分かれてしまった。より多くの生徒が協働的な学びの有効性を実感できるようなICTの活用や話し合いの進め方、合意形成のあり方などの指導も必要である。

自らの生活を振り返り考えを深めるという学習活動は、生徒の生活環境による価値観の違いが大きく影響してしまうが、設定した課題に対する考え方や答えは一人ひとりが違うことが当たり前である。他者との考えを交流し、よさを認め合える活動を繰り返すことで、自分らしい実践の在り方を見付け、身に付けさせていきたいと考える。「自分はどうか」「自分にとって望ましい消費行動とはどのようなことか」を常に投げ掛けていくことが大切であると感じる。

今後、さらに生徒の実践力を高めるために、「A 家族・家庭生活」、「B 衣食住の生活」の学習内容をより細分化し、「C 消費生活・環境」をより効果的に組み入れた指導計画を作成し、家庭分野の目標である実践的な態度を育んでいきたい。

[illegible]



<講演>

「資質・能力を育む

技術・家庭科の授業づくりと評価」

<講師>

文部科学省初等中等教育局 教育課程課  
元教科調査官 筒井 恭子 氏

## 「資質・能力を育む技術・家庭科の授業づくりと評価」

文部科学省初等中等教育局 教育課程課

元教科調査官 筒井 恭子 氏

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---